

三尾のタカハヤ

片野修

動物には、活動する時間と休む時間がある。いわゆる夜行性の動物は、昼間、隠れ家などで休み、もっぱら夜間に活動する。もつとも、人間でもそうであるように、昼間に活動するか、夜間に活動するかは、動物にとって必ずしも厳密にきまっているわけではない。

今から四五年ほど前（一九七九年）の六月、私は京都市の北方の大原に近い高野川の河川敷で、魚の観察をしていた。川の流れの一部が少し深くなって池のようになっており、そこにカワムツとタカハヤという二種類の魚が棲んでいた。いずれもコイ科に属するハヤの類の小魚であり、藻類と昆虫類などの動物の両方を食べる。

当時の私の研究対象はカワムツであり、その何個体かに標識をつけて動きを追っていた。カワムツが何を食べるのか、個体が出会ったときにどう振舞うのかなどを調べていた。池の長さは一五メートル、幅は三メートルほどであった。池の一端はコンクリートの壁となっており、その下部がえぐれて、奥深い穴となっていた。多くの魚は、この穴を出たり入ったりしながら、つまり隠れ家として利用しながら活動していた。

やがて私は、カワムツは昼行性であるが、タカハヤは昼間にはほとんど活動せずに、夕方近くになって、ようやく隠れ家から出てくることに気がついた。この池のカワムツが三〇尾くらいであるのに対して、タカハヤはその五倍以上いるように思われた。日没が近くなると、タカハヤの群れが、隠れ家の端から頭だけ突き出し、池の中をうかがっていた。まだ明るい池の中が恐いかにように。その後タカハヤはしだいに活発になり、日没後になると二〇〇以上の個体が池全体を動き回るようになった。

一方、カワムツは、夜八時頃になると、ほとんどが隠れ家の中に入ってしまい、真夜中には、タカハヤだけが水底を動いていた。この状態は夜明け近くまで続いた。そして夜明け直前の午前三時四〇分頃、まだ真っ暗なうちに、タカハヤは一斉に隠れ家に入ってしまった。その後、日が出るにつれて、カワムツが隠れ家から出て、再び池の中で活動を始めた。

ところがよく見ると、昼間にも隠れ家の外に出ているタカハヤが、三尾だけいた。彼らの居場所は、ちょうど池の隠れ穴の反対側、浅くて砂地底のところいきまっていた。三尾のタカハヤはそこで同じ向きに並んだまま、じっとしていることが多かった。この場所は、わずかな湧き水があったから、タカハヤに適していたのかもしれない。

魚の世界では、ふつう大きな個体の方が強い。ところが、三尾のタカハヤのうち、もつとも大きな個体でも、その全長は一〇センチに満たなかった。だから彼らは、自分達よりはるかに大きなカワムツが近くを通るたびに、それまで占めていた「定位置」をどかなければならなかった。面倒くさそうにカワムツをよけたタカハヤは、そのついでにあたりの水底について何かを食べようとすることもあった。

カワムツが去ったのち、三尾のタカハヤは、また同じように「定位置」に戻った。三尾の間隔は、ふつう三センチくらいであった。ところが、カワムツによる「妨害」ののち、タカ

ハヤどうしの間隔が、それまでに比べてわずかに乱れることがあった。すると、タカハヤの一方が他方をつついて、他個体が近づきすぎるのを防ぐのであった。

夕方近くに、隠れ家の中にいたタカハヤが活動を再開したとき、それはとても臆病な動き方をした。数個体の群れが隠れ家を出て池の中へ出たかと思うと、次の瞬間には、すばやく隠れ家に戻ってしまうということを繰り返した。ときどきこの群れは、三尾のタカハヤを見つげ出し、彼らに接近した。しかし、三尾のタカハヤは、それまでと動きを変えなかった。その行動のコントラストが、私にはとてもおもしろかった。カワムツは昼行性で、タカハヤは夜行性といった単純な割り切り方はできなかった。個体はそれぞれ独自の振舞い方をする。

残念ながら夜間に三尾のタカハヤがどのように活動したのかは、わからなかった。真つ暗な中で、個体識別をすることができなかったからである。また夏には、カワムツとタカハヤが同じ時間に活動していたこともある。だから、どうしてあのか、タカハヤがもつぱら夜間に活動し、夜明け直前に一斉に隠れ場に入り、それでも三尾だけ隠れ家の外で活動する個体があったのかは、今もってよくわからない。私は、その後、カワムツ、ナマズ、モツゴ、アユなどを研究対象にし、タカハヤを調べていないからである。

しかし、魚の活動時間や食べ物や動き方には個性がある。それは五〇年前の生態学や行動学では、ほとんど取り上げられなかったが、現在では無視することができない問題として注目されている。ある個体は、他と違ってることによって、資源をめぐる競争を緩和したり、役割分担をして集団生活をうまく成り立たせたり、異なる環境に適応したりすることができ。だから、個性があることは、生物学的にも意味がある。

最近、河原で遊ぶ人が増えてきた。その多くは、魚釣りをしたり、網をもって魚を追いかけたりする。けれども、魚にあまり近づかないで、彼らが何をしているのか、何かおもしろい振る舞いをしないかと観察するのも、けっこう楽しいのではないかと私は思っている。

この随筆を書いてから、三十年近く経ってしまった。しかし、その後もタカハヤの行動や社会はほとんど研究されておらず、この随筆で話題にした活動時間や個性も謎のままである。したがって、この随筆の意味はまだあると考えて、ここに再録した次第である。舞台となった小池は、私が大学院で初めて研究に取り組んだフィールドであり、当時の新鮮な感覚が蘇ってくる。

タカハヤについての研究が進まなかった理由の一つは、動物の行動という地味なテーマが日本で流行らなかったこともあるが、タカハヤが観察しにくい魚であることも影響したであろう。小さな魚であり、標識をつけても背中を川底にこすりつけて、はずしてしまう。体表にカワムツのような特徴がなく、それでいて個体密度が高い。しかし、実験池や実験水槽を用いてしらべれば、興味深い発見が見つかると思う。若い研究者にはぜひ挑戦してもらいたい。

本随筆は一九九五年に月刊誌「アーガマ」一三四号の二二〜二四ページに掲載されたものを、現在の視点から加筆・訂正したものである。